

第52回車座集会（建設緑政局）摘録

- 1 開催日時 令和4年3月27日（日） 午前10時00分から正午
- 2 場 所 川崎キングスカイフロント 東急REIホテル
- 3 参加者等 31名（参加者21名、傍聴者約10名）

<開会>

司会：それでは定刻となりましたので、ただいまから「第52回車座集会」を始めさせていただきます。

本日の車座集会は、「多摩川の未来を考える～150万人市民が親しむ川づくりに向けて～」と題して、すべての市民が多摩川に親しんでいる未来に向け、市民・企業・行政等が協働していくことを目的に、市長と参加者の皆さんで意見交換を行っていただきます。

本日は、多摩川で活動する市民団体や、多摩川の利活用に参加する企業・団体などの方々に御参加いただいておりますので、ここで御紹介させていただきます。また、それぞれの活動や取組についても簡単に御紹介させていただきますので、スクリーン又はお手元に配布した「参加者の活動・取組」の資料を御覧ください。

それでは、お名前をお呼びいたしますので、呼ばれた方は手を挙げていただきますようお願いいたします。

はじめに、市民団体から、水辺の楽校の方3名を御紹介いたします。

だいし水辺の楽校 富田 貞子（とみた さだこ）さん、
とどろき水辺の楽校 山下 亜希子（やました あきこ）さん、
かわさき水辺の楽校 安立 潔（あだち きよし）さん、

水辺の楽校は、子どもが屋外で遊ばない、自然体験が不足しているなどの背景から、国土交通省、文部科学省、環境省が連携して「【子どもの水辺】再発見プロジェクト」として進めているものです。川崎市内では、先ほど御紹介した3校があり、それぞれが活動するフィールドを活かし、子どもたちが河川に親しむ様々な自然体験活動を行っています。

続きまして、特定非営利活動法人の方3名を御紹介いたします。

特定非営利活動法人 多摩川エコミュージアム 福田 真（ふくだ しん）さん、
特定非営利活動法人 多摩川干潟ネットワーク 佐川 麻理子（さがわ まりこ）さん、

特定非営利活動法人 とどろき水辺 鈴木 眞智子（すずき まちこ）さん、

各団体は、水辺の楽校と協働するとともに、近隣の小中学校等への環境学習や、多摩川河川敷のフィールドを活かしたイベント等の取組を行っており、多摩川の防災・環境・歴史・文化等の情報発信も行っております。

あわせて、鈴木眞智子さんにつきましては、丸子の渡し復活協議会の立場としても御参加いただいておりますので、活動を御紹介いたします。

丸子の渡し復活協議会は、多摩川の歴史的な遺産である渡し場、「丸子の渡し」について、その価値を広く市民をはじめ内外に伝えるために活動しております。近隣の小中学校への授業として「丸子の渡し体験」を実施しているほか、「丸子の渡し祭り」を開催し、対岸の大田区の団体とも連携し、多摩川の両岸を往来する渡し船の乗船体験などを行っております。

続きまして、指定管理者の方2名を御紹介いたします。

多摩川緑地パークボール場の指定管理者、株式会社よみうりサポートアンドサービス 室井 俊信（むろい としのぶ）さん、多摩川緑地バーベキュー広場の指定管理者である共同事業体の代表企業、太平洋総業サービス株式会社 中沢 大輔（なかざわ だいすけ）さん、

太平洋総業サービス株式会社につきましては、のちほど御紹介する丸子橋周辺河川敷の社会実験にも参加しております。

この2施設は、指定管理者制度を導入し、民間活力による効率的・効果的な管理運営や市民サービスの向上に取り組んでいるほか、指定管理者の自主事業により、多摩川河川敷を活かしたイベントや地域と連携した取組などを行っております。

続きまして、カワスイ川崎水族館 小川 泰史（おがわ ひろふみ）さん、カワスイ川崎水族館は、本市初の水族館として令和2年7月に開業し、「世界の美しい水辺」をテーマに、多摩川や世界の様々な環境に暮らす生きものを最先端の技術を駆使して展示しております。また、環境への取組も行っており、SDGsに関する子どもたちへの環境教育や、生きものの保全活動などを行っているほか、多摩川で活動する団体の取組へも協力しております。

続きまして、多摩川の刈り草の再利用に向けた研究に取り組む団体から3名を御紹介
します。

学校法人東京国際大学 宮口 直人（みやぐち なおと）さん、
橋本 光騎（はしもと こうき）さん、
公益財団法人河川財団 八木 裕人（やつき ゆうと）さん、

この2団体の取組は、「大学生観光まちづくりコンテスト2017多摩川ステージ」
で多摩川における循環型の仕組みづくりを提案し、ミズベリング賞を受賞、多摩川の
堤防刈り草のペレットの実用化を目指して取り組んでおります。また、幸区にある古
市場小学校の授業で環境学習を行っているほか、多摩川でのイベント等を通し、取組
の周知・啓発活動を行っております。

続きまして、多摩川河川敷で継続的にイベントを行っている団体の方1名を御紹介い
たします。

多摩川キャンドルナイト灯と人実行委員会 平方 慶太（ひらかた けいた）さん、

この団体は、先ほどの2団体と同じコンテストにおける駒澤大学の提案をベースに、
「キャンドルスケープ川崎」と題し、多摩川河川敷でイベントを実施しており、ロウ
ソクの灯りによる幻想的でゆるやかな時間を作るとともに、地域の活性化を目指して
活動しております。

続きまして、多摩川河川敷の新たな利活用に取り組んでいる団体から6名を御紹介し
ます。

はじめに、中原区の丸子橋周辺地区で取組を行った3名を御紹介します

サントリーホールディングス株式会社 簗毛 宏明（みのお ひろあき）さん、
武蔵小杉エリアプラットフォーム 谷村 晃子（たにむら あきこ）さん、

この2団体と、先ほど御紹介した太平洋総業サービス株式会社は、中原区の丸子橋周
辺の多摩川河川敷において、本市が主催する社会実験への参加や、野外映画のイベン
トなど、多摩川河川敷のオープンスペースを活かした新たな利活用に取り組み、様々
なコンテンツで賑わいの場を創出しました。

次に、多摩区の登戸地区で取組を行った4名を御紹介します。

小田急電鉄株式会社 二ノ宮 俊介（にのみや しゅんすけ）さん、
松浦 雪恵（まつうら ゆきえ）さん、

一般社団法人多摩区ソーシャルデザインセンター 伊藤 直人(いとう なおと)さん、
堀川 華那(ほりかわ はな)さん、

この2団体は、多摩区登戸地区の多摩川河川敷において、本市と小田急電鉄株式会社の主催による「登戸・多摩川 カワノバ」というイベントにおいて、スケートボード等の無料体験会やフリーマーケットなど、こちらも魅力的な内容で賑わいの場を創出しました。

また、これらの取組は、多摩川河川敷の利活用という視点だけではなく、不法投棄や騒音などの課題解決も目的としております。

続きまして、本日の意見交換の後半で進行をしていただく方を御紹介します。

ミズベリング事務局 山名 清隆(やまな きよたか)さん、
ミズベリング事務局の活動は、また後半の意見交換の中でも詳しくお聞きできると思いますが、新しい水辺の活用の可能性を切り開くための官民一体の協働プロジェクトとして「ミズベリング」を推進しております。

続きまして、国の行政からの出席者を御紹介いたします。

国土交通省京浜河川事務所河川環境課 野口 典孝(のぐち のりたか)さん、
京浜河川事務所は、河川管理者として堤防や護岸の工事などの治水や、流域住民・自治体とのパートナーシップによる川づくりなどの事業を行っております。

最後に、本市の行政からの出席者を紹介いたします。

福田紀彦(ふくだ のりひこ)川崎市長でございます。
磯田博和(いそだ ひろかず)建設緑政局長でございます。

<市長挨拶>

市長：皆さん、改めましておはようございます。車座集会へ御参加をいただきまして、ありがとうございます。

この車座集会、もう52回目になります。この2年間、コロナでほとんどこういう集会ができていなかったんですけども、皆さんの御理解と御協力で、今日開催することができました。本当にありがとうございます。

いろんなテーマを取り上げてきたんですけども、こういう車座というものいろんな方々の御意見を聞いて、そして市の施策に生かしていこうということと、もう1つは、1つのテーマでいろんな人たちがいらっしゃるという、今日もそうですけれども、多摩川というテーマで、こんなにも関わっている方たちがいる。実は、その方たちというのは、何となく知っているけど、よく深くは知らないとか、あまりつながっ

ていないということは、実は多摩川だけじゃなくて本当に様々なテーマであります。

この前、もう1年ぐらい前になりますか、例えば中原区は保育園が増えてきたので、保育園関係者や自治会関係者にも集まってもらってとか、いろんな人たちに集まってもらったんです。そうしたら、保育園、もうすごい量できていますから、公立の保育園も民間の保育園も一体、どこで誰が何をやっているのか分からないと。保育の人が子供さんたちを連れて近くの公園に行くんだけど、公園の花壇いじりをやっているのは自治会町内会の人たちで、そこで遊ばせてもらっている。でも、自分の保育園がどこの自治会に属しているかも分からないという、そういう話だったんですね。じゃあ、皆さんと一緒に集まってもらって、何が課題なんだろうかと。そして、どうやってうまく連携すれば、もっとうまくまわるのかみたいな話をして、これっていろんな発見あったよね、いい会だったなど。私たち行政にとってもいい学びでありましたし、そのエリア自体がものすごくうまく有機的につながったという会になりました。

いろんなテーマやってきましたけど、今日は多摩川ということでやらせていただきます。

改めてお話ししますが、もうこれだけの多くの16団体が集まっていたいて、皆さんのすばらしい活動をしていただいていることに心から敬意を表したいと思います。

多摩川について、まず現状、今を知るというのが前半、そして後半がこれからの多摩川の未来ということで先ほど御紹介あった山名さんにファシリテートしていただいて、前半、後半で分けていきたいと思います。

大体、車座集会はずっと私が一人でやり続けているんですけど、初めての取組で後半は山名さんにお手伝いをいただきたいというふうに思います。

では、今日、皆さん、よろしく願いいたします。

<所管課からの開催趣旨説明>

司会：それでは、ここからは、市長との意見交換に移らせていただきます。

初めに、本日の車座集会の開催について、資料を基に、簡単に御説明をさせていただきます。

今回の車座集会のテーマは、「多摩川の未来を考える～150万人市民が親しむ川づくりに向けて～」でございます。

「川崎の母なる川」である多摩川では、これまで市民・企業・行政等が、豊かな自然環境や広いオープンスペース等を生かし、様々な活動や取組を行ってきており、多摩川の魅力や価値を引き出すことにつながっております。一方で、令和元年東日本台風による被害や、その後の新型コロナウイルス感染症の影響により、多摩川を利用することや、イベント等の開催が制限されるなど、これまでのような活動や取組ができない状況が続いております。

しかしながら、ここで改めて皆様と多摩川におけるこれまでの活動や取組の必要性を再認識するとともに、今後さらに多摩川の魅力向上やにぎわい創出につなげるにはどうすればよいのかを考え、150万人の市民がいつでもどこかで多摩川に親しんでいる、そんな未来を創っていきたいと思い、今回のテーマで車座集会を開催するものです。

意見交換の進め方といたしましては、二つのステップで段階的に意見交換し、参加者の皆様それぞれの立場や視点から御意見をいただきながら、議論を深めていきたいと思います。

<意見交換①>

司会：それでは、ここから、1つ目のステップといたしまして、「多摩川の現在（いま）を知る」というテーマで、市長と皆様で意見交換していただきたいと思います。

市長、よろしく願いいたします。

市長：今、153万8,000人の人口が川崎市にいますけれども、多摩川に関するアンケートという市民アンケートというのをずっと経年で取っています。市民アンケートやって、多摩川を利用したことがあり、魅力を感じる人の割合という同じ質問をずっとやっているんですけれども、令和3年、直近のパーセンテージ、43.5%と今までで一番高いです。その前、令和元年は35%、29年は35%とかというふうな形で、大体35、36、37%とかというふうな形で、その辺りで推移しています。

私たち、司会からもありましたように、母なる多摩川というふうに思っていて、私も思っているし、ここに集まっている人たちもみんな思っていると思うんですけれども、残念ながら、まだ半分以下の人しか多摩川が魅力的な存在に、自分ごとになっていないというか、自分の母にはなっていないという、そういう現実があると思うんです。そういう意味では、僕はちょっと悔しいというふうに、正直、思っています。みんな、こんなに多摩川を愛しているんな活動をしていただいている人たちと、多分共通だと思うんです。153万市民に多摩川を本当に好きになってもらいたいし、関わってもらいたいし、やっぱり母なる多摩川というふうに愛してもらいたいというふうにするためには、どうすればいいんだろうかというふうなことを、今日、現状をしっかり知って、どううまくみんなで連携して、さらに仲間を増やしていけるかということ、ちょっとずつ話を進めていきたいというふうに思っております。

まずは、市民活動、水辺の楽校ですとか、それに関わるNPO法人の皆さんたちから、お話を聞いていきたいというふうに思っています。

今、やっておられる活動に対しての、現状の課題だとか、あるいはこれからどうしていきたいんだというふうなことについて、少しコメントをいただければと思います。

山下さん：とどろき水辺の楽校の山下です。

川崎市には水辺の楽校が3校ありまして、それぞれの環境に合った活動をしております。

とどろきでは先ほど母なる川というように、幼少期に川に入る体験というのを重要視しておりまして、実際、体験していろいろなことを学んでほしいというイベントを行っております。やっぱり川に多くの方に来ていただきたいのですが、川というものを知らないという危険を察知できないとか、そういうことを学ぶ場をつくってほしいと思います。

市長：ありがとうございます。何か課題に感じていることってありますか。

山下さん：課題に感じていることは、だんだんスタッフが高齢化しておりまして、なかなか若い方がイベントのスタッフとして参加する機会がないという、なかなか参加して下さる方がいないということですね。イベント自体の参加者はとても多いんですけども、スタッフとしての活動に関わってくれる人がなかなか見つからないです。

市長：なるほど。ありがとうございます。

鈴木眞智子さん、何か今の課題について、少し補足みたいなものありますか。

鈴木さん：昔は親子で参加してくれると子供がもう卒業して中学校になっても、そのお父さん、お母さんたちがスタッフとして残ってくださって、そのまま現在のスタッフは全員そうなんです。子供は卒業しても自分は残る。でも、今の若いお父さん、お母さんは、もうそれどころじゃなくて、自分の子供、自分の生活で手いっぱい、なかなか市民活動には参加できないという現状なので、とてもつらいところです。

市長：なるほど。ニーズはあるけど運営側のほうも結構つらいよということですね。

鈴木さん：そうです。

市長：確かに僕の子供も、もう10年以上前ですけど、多摩川を歩かせてもらって、ジャケットを着てですね。あれってすごい活動で、いや、僕、子供の頃、多摩川汚くて、そんなこと絶対できなかったというふうに思ったんですけども、今本当にきれいになって、ああいう体験ができるようになってくれるというのは、本当に皆さんのおかげだと思うので、本当にありがとうございます。でも、課題があるということですね。ありがとうございます。

次のグループ、ちょっとたくさん、今日16団体いるので、ちょっとずつ、代表者

の方に少しお話をいただければというふうに思うんですけども。それでは、こちら側で指定管理者の方とそれからカワスイさんもせっかくいらっしゃるので、今まで協働連携で様々な取組をやっていただいているというふうに思うんですけども。今の課題だとか、あるいはこういったことをもっとやっていきたいんだけどねとかというふうな話があれば、ぜひ、お話しいただければと思うんですけども。

中沢さん：課題としましては、自由に使える部分と使えない部分が混同されているというイメージがあるんですよね。こっちは使ってはいけないですよ、こっちは大丈夫ですよと。分かりにくいのかなというところはあります。

市長：そうですね。これはものすごく感じます。今、バーベキュー広場を運営管理していただいていますけれども。本当に無法地帯のようにバーベキュー場になっちゃっているようなところもあったりして、それはすごい課題だなと。だから本当に使っていいところ、悪いところというのがよく分からないというふうなことがあると思いますね、確かに。

室井さん：コロナ禍になって利用者の方が減るのかなと思いましたが、逆にものすごく増えていまして。ですから、結局、外でやるそういったスポーツというんでしょうか、そういったものに今、目を向けられているという状況でありまして。つまり、利用者が増えれば増えるほど感染対策は本当に徹底してもちろんやってきておりますが、現状今18ホールということで、これはさらに増やせたらいいんですけども、なかなかいろんな問題というか、いろんなものをクリアしていかなくてははいけませんので、そういったところであればさらにいいかなと思います。

それで、今、60代、70代、80代の方々がもう7割以上占めておりますので、今後はいかに若い方たちを取り込んでいくかということが課題の1つ。それに対して力を入れていくということを考えております。

市長：ありがとうございます。先ほど申し上げた近年では一番高い魅力を感じている人、今年43%と今まで一番高いんですよね。多分、このコロナ禍で屋外に出る、多摩川に出た人っていうのは結構いると思うんです。なので、それやってみてすごく、やっぱり魅力的だなというふうに再発見した方がたくさんいると思うんです。本当に屋内系はコロナで大きく縮小、感染対策も大変だったということですけど、外に出るという機会がだんだん増えてきたということは、ちょっと私たちにとっては多摩川で言えばチャンスかなというふうに思いますよね。

平方さん：多摩川キャンドルナイトの平方と申します。よろしく申し上げます。

私たちのほうは、癒やしですとかライフスタイルの思い直しですとか、そういったものを目標としてやっているんですけども、ほかの団体さんと違って、ちょっと特殊なところが、募集活動をかなりやっています。50人ぐらいボランティアメンバーがいるんですけども、説明会を年に10回ぐらいやったりして、20代、30代の方に大変興味を持っていただいているというところがございます。ネットで募集のほうをさせてはいただいているんですけども、地元の活動熱心な方、キーマンの方とはあまり出会うことがなくて、そういうことを課題として感じております。

市長：なるほど。ありがとうございます。

簗毛さん：サントリーホールディングスの簗毛です。よろしくお願いします。

我々昨年の10月から、太平洋総業の中沢さんと一緒にバーベキュー広場の横のところでコーヒーのキッチンカーを営業させていただいています。丸子橋の麓のところで週に1回、日曜日に出させていただいているんですが、非常に河川敷利用者の方にはうれしいという声をいただいています。特徴的なのは、ランナーの方とか散歩の方が、あとは軽食をちょっと販売しているんですが、軽食をつまんでいかれる方も多くて、何かマラソンでいう補給所じゃないですけど、街道でいう宿場町じゃないですけど、結構、そこでエナジーためてまた活動するみたいな感じで利用させていただいて。本当に今までなかったのか、ここら辺、つまめるところがなかったんだよねという、大変ありがたいお言葉をいただいているので、引き続き、我々以外、コーヒー以外の需要もすごいあるというふうに感じるので、継続して取り組みさせていただきたいなと思っています。

市長：ありがとうございます。すごくうれしいです。売上げ、上がっていますか。

簗毛さん：ありがたいことに。

市長：ありがとうございます。地元の方とか、中沢さんのところと一緒にやっているというふうな話でしたけれども、地元と関わりというのは。

簗毛さん：中原区の今井上町にサントリーのR&Dセンターがありまして、南武線から見えるんですけども、もう長くあそこでさせていただいているので、川崎市内で営業を今ちょっと重要視してやらせていただいています。

市長：ありがとうございます。

谷村さん：武蔵小杉エリアプラットフォームというのは、小杉駅周辺の企業さんと、お店の方と、商業施設さん、あとは商店街とか学識の方、大体20団体ぐらいが集まって、その小杉駅周辺のまちづくりをみんなで考えていこうという団体なんですけれども、3月に社会実験を行いました。そのときにアンケートを取ったんですけれども、小杉のどういうところが好きですかというのと課題を聞いたところ、子供を自由に遊ばせる場所が少ないという意見がすごく多かったですね。でも、私からすると多摩川あるじゃんと思っていて。そういうアンケートからも分かるように、やっぱり皆さん知らないんですね。マンションが建っているところから歩いて10分とか15分ぐらいかかるので、近いけどなかなか行きにくい場所にあるというのが私たちの課題として感じているところです。なので、エリプラのみなんで、ちょっとその魅力の1つとして多摩川と駅周辺をどうやってつないでいけるかなというのを、これから考えていきたいと思っていますところです。

市長：ありがとうございます。

平方さんのやっているキャンドルの取組って、場所はどこでやっておられますか。

平方さん：場所としては、ここ最近イベント会場としては新丸子の丸子橋のところでやらせていただいているんですけど、コロナ禍になる前は二子新地のバーベキュー場のすぐ隣などで、ピクニックしながら企画会議などをさせていただいておりました。

市長：集客は、どういったところから、みんなそのことを知っているんですかね。

平方さん：それってボランティア、その企画スタッフですか、それとも集客。

市長：集客、お客さんですね。ボランティアじゃなくて、実際に見に来る人たち。

平方さん：実際、SNSで、見栄えがあるイベントですので、かなり集客ができているというところがございます。

市長：ボランティアの方たちは地元の方ではないですか。

平方さん：地元の方もいらっしゃいますが、半々ぐらいですね。地元の方と、あと市外の方という感じでございます。

市長：なるほど。先ほど、平方さんがボランティア50名ぐらい集められるんですけども、地元の方たちとはあまりつながっていないとおっしゃっていましたよね。それは地元

としてはすごいうれしい話で、ぜひつながりたいというふうに思っている方たちというのはい多いです。福田さん、どうですか、そんなにボランティアが集まるんだという。

福田さん：とても羨ましい限りなので、ボランティアさんがそんな形で。自分はまだ、今日行って来いという若手なんですけれども、うちのほうも高齢化がすごくて、皆さん、自分の本当に父親、母親よりも年上の方たちばかりなので、SNSのところで集まってくれるボランティアさんというのは、ぜひ欲しいですね、羨ましい限りです。

市長：そうですね。いや、これは一緒にコラボすると、何かもっと面白いことあるんじゃないかなという。それはもう未来の話で、山名さんのほうに、今度2部のほうにのってくるかもしれませんけれども。そういう課題が見えてきました。ありがとうございます。

八木さん：河川財団でございますが、うちは国道1号のすぐ上流のところに川崎リバーサイドパークというゴルフ場を運営させていただいているんですが、コロナでお客さんどうなるのかなと思ったんですけど、さっき市長もおっしゃっていましたが、屋外スポーツに結構人が来てくれて、今年も結構稼がせていただいています、そういう意味で多くの人に来てくれています。あそこのところに、堤防の上のところなんですが多摩川交流センターというのがあります、そこでゴルフ場の人たちの受付もするんですが、サイクリングやっている人とか、堤防とか川に遊びに来た人たち達も、トイレとかもありますので、あそこで休憩したり、ちょっと何か飲んだりすることはできるんですが、逆に人が増えてきてしまっていて、交流センターのところをもう少し改善しないと密になりやすいというところもあります。そういうところで来年度、改築しようと考えていますので、そのときに川崎市さんとも一緒になって、あそこを本当に多摩川の交流センターとしてやっていきたいと思っていますので、よろしく願いしたいと思います。

市長：ありがとうございます。

宮口さん：東京国際大学の宮口でございます。よろしくお願いいたします。

市長から課題ということでお話いただきましたので、端的に2点お話を申し上げたいと思います。

まず1つは、多摩川の愛着を感じるのがまだ半分いないという点なんですけど、私自身はもう5年以上多摩川に関わっていますが、今日お集まりいただいているような皆様がこんな楽しいイベントをやっていけば、恐らく過半数は越えて6割、

7割となると思うので、ぜひ市長、継続して多摩川で楽しいイベントをやっていたければ、先ほどの課題感に対して有効な手だてだと思っています。

2つ目は、私たちの活動の課題点なんですが、私たちは実は全然イベントではなくて、ここにいる八木さんからの多大なる尽力をいただいた上で、堤防の草を刈ったものから「ペレット」というエネルギーを作ったり、今年度はそのエネルギー以外にプラスチックの量を半分に減らした、その半分を刈り草で入れているゴルフのティーを作ったりしているんですね。まさにこれって、今2030年に向かって、世界がやっていたいかなければいけないグリーン社会の実現を、この川崎市多摩川からやっているわけなんですね。でも、我々の活動って、多分、知っている方は誰もいないぐらい、まだ認知が取れていないんですね。月に1回しかやっていない活動ですし、コロナ禍ではできていないと。ですから、私たちとしては、イベントのような派手さはないんですが、とても地球にとって大切な活動を多摩川、川崎からやっていくということを継続して伝えていくということが課題だと感じています。よろしくお願いします。

市長：なるほど。ありがとうございます。

しかし、こういう大切なことを楽しいものとかみ合わせて、何か知ってもらおうというふうなのが、すごい大切なことかなと思いますよね。何か今日もいろんなコラボができる、ベースができればありがたいなというふうに思っています。

カワスイさん、小川さんに来ていただいていますけど、お立場から御発言いただけますでしょうか。多摩川のことにすごく愛を感じています。ありがとうございます。

小川さん：ありがとうございます。カワスイ川崎水族館の小川と申します。よろしくお願いします。今日はありがとうございます。

生物屋さんの立場から、多摩川の現状ということ、まずは御説明すると、非常によくなっているところも多くあります。例えばアユですとかマルタといったような割とメジャーな生き物が戻りつつあって、よい多摩川の側面もあるんですが、実際には気候変動の問題ですとか、あとは神奈川県河川流域全体で見られるんですが、カワリヌマエビといった新しい外来種問題というのがやはり出てきています。

そういったいろんな側面の多摩川の生態系というのを、やはり伝える立場として水族館というのは非常に重要な立ち位置かなと思っています。できれば、我々、メディアとしての水族館として多くの市民の方に御利用いただきたいということで、川崎市民割などの割引サービスなども行っておりますけれども、まだまだなかなか多くの生き物ですとか、水に関してのファンというのを増やし切れていないなという実感がありまして、そこら辺が現状の課題かなと思っていますので、皆様のお力添えをいただきながら、ドットとドットをつないでいくコネクティングドットとしての中継地としてカワスイを御利用いただけたらと思いますので、本日は引き続き

よろしく願いいたします。

市長：ありがとうございます。

それぞれの取り組んでおられるイベントですとか、活動をやって取り組んでいたいているんですけれども、実は先ほどの市民アンケートで全市的に取っているんですけど、行政区7区ある中で、かなりばらつきがあります。一番魅力を感じているのは、中原区民です。一方で、中原区だと21%占めているんですけれども、一桁台というのが麻生区、それから川崎区、それから幸区が辛うじて10%ということで。この3区、麻生、川崎区、幸区というところが低い満足度というか、魅力を感じているという人たちが少ないというふうな、ちょっと残念な感じになっているんですね。だから川崎全体でどうかということよりも、川崎区、幸区、川に接しているのになど、宮前区、私、宮前区に住んでいるんですけれども、宮前区は川に接していないんだけど、川崎区、幸区よりは高いという。麻生区も多摩川に接していないので、そういった意味ではちょっと若干難ありかなというふうに思うんですけど。ただ、やっぱり、せっかく川崎市民、みんなが魅力を感じてもらおうという、そこにどうやって接点をつなげていくかというふうなのがすごく大事なかなというふうに思っています。

二ノ宮さん：小田急電鉄の二ノ宮と申します。弊社については、登戸から和泉多摩川の高架橋の部分で多摩川と接しさせていただいております。昨年の11月、周辺の課題解決と、あとはポテンシャルの発見を目指してということで、カワノバという取組を川崎市様と共催で執り行わせていただきました。

私の感じている課題としては、ほかの方でも何点か挙がっておりましたけれども、間違いなくオープンスペースのニーズという観点で河川敷の需要が高まっていると感じております。

一方で、そのニーズの高まりに対して、例えば感染症対策であったり、あるいはお手洗いとか、電源だったり、給排水だったり、ハード側の整備がまだまだ対応し切れていないのかなというところと、あと、これは鉄道会社ならではかもしれませんけれども、活用した際の近隣の方の御理解ですかね。人が集まることそのものに対して、やはりコロナ禍なので非常に理解を求めることが難しいけど、やっていかなきゃいけないことなのかなというふうに感じております。

市長：ありがとうございます。

伊藤さん：一般社団法人多摩区ソーシャルデザインセンターから参りました、学生代表をしております伊藤直人と申します。

多摩区ソーシャルデザインセンターの取組といたしましては、先ほど御発言されて

いた小田急電鉄さんと一緒に、昨年度の11月、「登戸・多摩川 カワノバ」というものに参加させていただいたのと同じ会場で、5月に「登戸・たまがわマルシェ」というものを我々ソーシャルデザインセンター単独で主催して開催しております、ソーシャルデザインセンターのもともとの機能としまして、中間支援と、あとコミュニティをつくるという観点から、河川の利用だけでなく、まち全体を盛り上げながらというところを目的として活動しています。それと並行して河川利用のほうにお声がけをいただきまして、参加しているという状況です。

我々、本日参加させていただいている伊藤と、堀川、大学3年生と2年生でして、我々多摩区ソーシャルデザインセンター現在50名の大学生、それも川崎市の麻生区と多摩区で小・中・高を過ごして育った子たちが地元を活性化しようという思いで活動、ボランティアで参加しております、先ほど述べさせていただいた登戸・たまがわマルシェ開催時には150名の学生を集めてイベントを開催させていただきました。

課題といたしましては、先ほど述べられている方もいらっしゃるんですけど、そういう単発のイベントもいいんですが、それをやはり持続的なものにしていく、我々毎月1回、登戸駅の近くの河川を利用させていただいて、子育て世代を中心としたものを対象にイベントを行っております。そういったものを持続的にすることによって、こっぴで使われる場所なんだなということを御認識いただいて、例えばごみの問題だったりとか、そういったところを使っているからごみを捨てちゃ駄目だよねとか、そういったところの認識につなげていく、持続可能というところは大切だなというふうに思っています。

それともう1つ、河川利用だけではないと先ほど述べさせていただいたんですけども、我々、まちの飲食店だったりとか、ほかの市民活動団体さん、今まで多摩川を御利用していただけていなかった皆さんを中間支援の立場から、活動の場と団体さんや飲食店を御紹介するという形で、我々イベントのときに御参加いただきまして、まち全体を巻き込んだ目線で、皆さんの目線が多摩川って魅力的だよねとか、そういったところに向いていくような取組を、やはり先ほど述べたように持続的なものにしていくということは、大事だというふうに考えております。

市長：ありがとうございます。大学3年生、立派過ぎます。ソーシャルデザインセンターって今、各区で立ち上げて、多摩区が一番先行しているんですけども、特に多摩区の特徴的なのは、こういう大学生がたくさん入っていただいているということなんです。多摩区、大学がいっぱいあるということだけではない、すごいパワーを感じていて、ほかの区もぜひ、こういう若者と一緒につくっていくソーシャルデザインセンターであってほしいなど。ここ中間支援というか、人と人、団体と団体をつなぐようなすごくいい活動をしていただいております。今まさに始まったばかりのところですね。

れども、カワノバというところでも一緒に組んでやっていただいているということです。

堀川さん：こんにちは。私は多摩区ソーシャルデザインセンターで同じく学生スタッフをしております、堀川華那と申します。よろしくお願いいたします。

私は、多摩区のソーシャルデザインセンターで活動しているんですけども、家自体は中原区にありまして、先ほど何度か御紹介があったんですけども、丸子橋の近くに住んでおりまして徒歩3分ぐらいのところに家があるので、小さいときはよく家族でボール遊びをしたりですとか、あとは部活動の合間とかにランニングをしたりというように、私自身すごく多摩川の河川敷と一緒に生活をしてきて育ってきたような環境になっております。課題として感じていることとしましては、私自身が幼少期に遊んでいたということと、あとソーシャルデザインセンターに入って様々な活動をしていく中で、やっぱり多摩川の魅力というか、最近近く公園でなかなかボール遊びができなかったり、広いスペースを使って何かをするというのが難しくなっているかなと感じているんです。ですが、多摩川の河川敷ってやっぱり広くて、解放感もあって、今日みたいに天気の良い日というのはすごく気持ちよく散歩ができたりするのがすごく魅力だと思っているんですけども、そういうのが地域の皆さんに伝わっていないのかなというのが、何となく私としてすごく課題に感じているところです。なので、イベントとかを通じて、まずは地域の皆さんに河川敷に来ていただく。こんなにいいところなんだ、こんなに解放感があって、子供ものびのびと遊べる場所なんだというのを知っていただくというのが、まずは課題の解決というか、大事なことなのかなと感じております。

課題の解決というところで、この多摩区ソーシャルデザインセンターと本日お越しいただいている皆様と一緒に何か活動をしていったりとか、こういう課題とこういう機会ですとか場所とかというのをつなげていけたらいいのかなと思っております。

市長：先ほど、小田急の二ノ宮さんからお話がありましたように、鉄道の事業者の方のパワーというのはすごくて、人の移動ってどういうふうになっているかって、基本的に沿線上で移動しているんですね。実は、川崎に転入してくれる人も転出していく人も、ほとんどが沿線上で動いているという実態がありまして。ですから、そういう意味では、小田急線沿線上でエリアの魅力を伝えていくというふうなものというのはすごいパワーがあって。例えば東急沿線が、東急さんがいろんなコマースを打っていく、それはそのエリア価値の向上が電鉄の価値にもなっていくし、というふうな形になっていくんじゃないかなと、それを皆さん今やっていただいているように、今回のカワノバの取組なんかもそうですけれども、こういう企業との連携というのはすごいこれから、もっともっとあるなど。

ですから、例えばソーシャルデザインセンターにこれだけ若者が集まっている。平方さんのところもそんなにボランティアの人たちが集まっているところと、意外とまだちょっと課題感はあるなといったところってうまく合わさっていけば、もっとやりたい人たちというのが知られていないといったところに、若干のもったいなさとか、私自身も悔しさを感じて、まだまだ課題があるなというふうに思っております。

PRのことも課題としてはあるんですけども、そもそも先ほどからちょっと出ている、この土地が使っていいところなのか、何をしたい場所なのかというふうなのが、なかなか分からないという、川のルールというふうなのがなかなか知られていないというところもあって。ぜひ、国の立場から京浜河川事務所の皆さんには、本当に大変いろんな御理解をいただいて、国のこの土地を川崎市がお借りして皆様の活動の場にさせていただいたり、御理解をいただいています。

それでは、ちょっと野口さんの立場から少しそんな観点からコメントいただけますでしょうか。

野口さん：多摩川を管理しております京浜河川事務所の野口と申します。本日、この場にお呼びいただきまして、誠にありがとうございます。

皆様の活動をお聞きして、本当に敬意を表するばかりなんですけれども、多摩川では、昭和55年に河川環境管理計画という、利用と活用の配置計画を策定したものに基づいて、今、利活用、一方では自然を守る、一方では利用していただくような、そういった計画を立てているところでございます。現在は、それに基づいて皆さん、川崎市さんの利用者の方には利用していただいているところなんですけれども。

最近では、河川敷の自由化といったもので、社会実験を経て、特例化というんですか、オープン化に向けた話も出てきてございます。それに向けて、今3年から10年という特例措置も大分緩和しているところでございまして、それには、地域といいますか、地元の皆さんの合意というものが非常に大事ななと思っておりますので、そういった利活用の自由化といいますか、可能性に向けては、皆さんとの協力とそれから連携といったところで、国の立場としては進めていきたいと考えております。

市長：ありがとうございます。うまく活用していくためには、やはり地域の人たちから合意がないとなかなか難しいというのは、先ほど二ノ宮さんからもそんなようなお話があったと思うんですけども、騒音の問題だとかごみの問題だとかというのは、実は河川敷利用のところでは、ちょっと無秩序になっているところというのが、近隣のところから苦情もあるし、ごみを住宅地でばらまっちゃうという、マナー違反みたいなものがたくさんあって。だったら、やめさせてくれというふうな声も出てきちゃうぐらいなので、ちゃんと適切に管理されている中でみんなが楽しむという、そういう柔ら

かいルールづくりというのをしっかりやっつけていかなきゃいけないと思うんですね。何か全ての規制的なだけというふうにやると、何となく面白くななくなっちゃうような感じもしますから、やっぱりしっかりとはするんだけど、柔らかくルールづくりを徹底していくというふうな形というのが望ましいんじゃないかな、というふうに思っております。

せっかく、まだ若干時間が残っていますので、そういう意味ではお一人ずつまだ発言されていない方からも御発言をいただきたいと思うんですが。

佐川さん：多摩川干潟ネットワークの佐川です。

まさに、今、この場所、すぐそのところに活動拠点があります、大師河原干潟館というところなのでね。

多摩川が用地として、場所として、快適な場所としてという意味合いもあるんですけども、まず何よりも多摩川、私たち、人だけではありません。いろんな生き物がいての魅力ある場所になる多摩川というふうに考えます。私たち人間と生物たちはフィフティ・フィフティということで、私たちがやっているところというのは、生物あつての、自然があつての場所というふうに強く感じますので。ちょっと余計なことかもしれませんが、いいですか。

皆さんに見ていただこうと思って、うちのタレントさんです。一番仕事をしてくれる、アシハラガニのタロウ君。多摩エコさんも“たまずん”をキャラクターにして、昨日ありがとうございました。とてもかわいいですよ、やっぱり生物達あつての私たちだと考えますので。こうやってカニを見てください。生物、いるよ。先ほど、福田さんがおっしゃった、何で川崎区って興味ないのっていうところありますよね。川崎区は本当に、特にこの辺ですけど、まれに見る公害に見舞われて、高齢の方は多摩川なんて汚くて怖くていけないよといまだに言います。なので、その人たちに向けて、こんなに生き物がいて、多摩川は自然が豊かなところだよということを発信していくのが私たちのミッションだと思って、考えてやっています。ぜひ、ここでしゃべるよりも、現に生物たちと触れ合っただけであれば。干潟館、来てください。

市長：課題感みたいなものって、何かありますか。

佐川さん：今、申し上げたことにも含まれますけど、やっぱり川崎区、特に自然がないところ、工業地帯、それこそこの辺なんかは、私だって子供の頃は、女一人じゃ歩いちゃ駄目だよ、そんなふうに言われたところでありました。まだまだそういったイメージの払拭というのが、され切っていないというふうに考えます。それを私たち、環境をやる人間だけじゃなくて、いろんな立場の方たちとも一緒に、そんなところじゃないんだよということを発信していただければ光栄です。

市長：ありがとうございます。佐川さん、ありがとうございます。

本当に素晴らしい活動をしていただいていることに感謝したいと思います。

2週間前、ちょうど多摩川スカイブリッジ、その橋が架かりまして、開通式をやったんですけれども。あれも環境に優しいというか、環境に正しく造った橋ということで、干潟のところを一回土砂を外したんですけれども、その土をもう一回埋め戻すというふうな形で、また再生させると。だから、あそこを、生物をしっかり保全空間になっているというのを、しっかりと踏まえたような取組もさせていただいて、こういう生き物がこういうふうに豊かにあるということ自体が、この多摩川の価値だというふうに思います。そういうことを地道に発信されていることに、敬意を表したいと思います。ありがとうございます。

富田さん：だいし水辺の楽校の富田と申します。よろしく願いいたします。

多摩川の橋が最近、大分、人が混んでいるようです。そして、他県から、東京都から結構歩いてこちら側に来て、私どものだいし水辺の楽校に立ち寄っていただいております。また、トイレの休憩（場所）がないので、トイレを貸してください、よろしいですかという、そんな声もあります。

今は、そのブリッジのおかげで大分、日曜日はもう100人を超える人が見えております。これからも多摩川の橋を利用して、みんなで渡ってみようかなという、そんな計画もしていきたいと思っております。

佐川さんのほうは、生物とかいろいろ詳しいので、私のほうはちょっとそういったものを計画して、みんなで歩いてみようという、今のところ計画中です。

市長：ありがとうございます。今日もものすごい多くの人たちが、ここを歩いていますし、サイクリングする人も出ましたし、この橋が架かったことによって、両岸が本当に回遊性のあるような形になってきて、東京、川崎が関係なくそうなっているというのは、すごく両岸で魅力を感じているんじゃないかなと思います。ありがとうございます。

安立さん：かわさき水辺の楽校の安立です。

私どもは、「かわさき」と名前になっていますけど、登戸周辺で、登戸・宿河原周辺で活動してまして、今、ちょうど二ヶ領用水の桜が満開になったところで、1年で一番人出の多いところで、昨日も多摩エコさんと一緒に桜のコンサートなんかをやっておりました。

課題として、やっぱり眞智子さんが先ほどおっしゃっていましたが、スタッフの高齢化で、基本的に地元中心にやっているんで、あまりSNS等をやって広げたくない。広げると今度は申込みがものすごい多くて、どうしようもなくなる。スタッフはもう疲れ果てて、もう元気がなくなっちゃうというようなところで、その辺りのバラ

ンス取りが非常に難しくなっているというふうに感じています。

市長：なるほど。ありがとうございます。

松浦さん：小田急電鉄の松浦と申します。

我々は、先ほど二ノ宮から、11月にカワノバを開催したというところを申し上げましたけれども、多摩川に関しましては、やはり小田急線で言うと新宿からの急行列車で約20分ぐらいと、非常にアクセスがよいところで。最近地域の皆様といろいろお話しする機会も多くありまして。やはりすごく豊かな自然資源として、やはり地域の皆様の誇りだったり、魅力に感じられているなというのをよく感じます。

一方で、我々としても課題なんですけれども、心理的な遠さというか、すごく目の前に、近くにあるのにちょっと気持ちの遠さがあるというところで。それは、もしかしたら沿線の道路だったり、交通量の多い道路、あるいは横断が少ししづらいところがあるとか、そういったところかもしれないです。少し活用の方法ですね、ソーシャルデザインセンターだったり、ほかの皆様のほうでいろいろなイベントをされていますけれども、日常のにぎわいといったところで、何かもう少し我々でも工夫、何か取組ができるところあるのかなと思って、これからも地域の皆様と一緒にやっていきたいなと思っております。

市長：ありがとうございます。

多摩川もいろんな時期があって、例えばこの前の、2年前の令和元年台風みたいなものがあって、ものすごい被害を受けてしまうと、河川敷なんて全く利用できない状況になってしまう期間が長かったり、とても危ないというふうに、あるいは何か事件、事故みたいなのが起きると、その都度何か危ないというふうになって、川が急に遠くになってしまう瞬間ってあるんですけど。やっぱり多摩川の魅力というものを、どううまく伝えていくか、そういうことも自然だからあるんだけれども。でも、多摩川って共に生きていく人も、生き物もということだと思えますよね。そういうのは何か絶えず継続的に持続的に発信し続けたいといけないなど。

あと、ハード面で言うと、なかなかやっぱり大きな道路で分断されちゃっているというのは、これはもう致し方ないというふうなことはありますけど、それでもやはり、今度は等々力のところから少しあちら側に渡れるような構造というのを考えたりとか、そのような工夫もできるのかなというふうに思っています。

橋本さん、東京国際大学で、学生さんでいらっしゃいますでしょうか。

橋本さん：はい、3年です。

市長：若い立場からという意味でも、ちょっとお話いただけますか。

橋本さん：私が感じている現在の活動への課題点としましては、先ほども挙げましたとおり、認知度の不足かなというところにあります。現在、提供しているのが堤防刈り草から精製したプラスチックに置き替えたゴルフティーのみという形になっているんですけども、ほかの形に置き替えてまた提供していくことで、今回の開催趣旨にもありましたとおり、どこかで寄り添っているというような形の生活を実現させることができるような、すごく将来性の高いものだなというふうに感じているので。そういったところは、私たちのほうでも、認知度の向上というところには気をつけて頑張っていきたいなと思っているところではあります。

また、ちょっと私たちの活動とは別になるんですけども、若手の人材が不足しているというふうに先ほどお話があったと思うんですけども、私の大学にもかなり多くのボランティアサークルがあったりですとか、私自身もボランティアサークルを立ち上げた身でもありますので、そういったところでは活動の枠組みを超えて協力させていただけるかなというふうに思っております。

市長：ありがとうございます。ペレットを使ったゴルフティーというふうなお話でしたけど、これってほかに、例えばお皿とかにはなったりするんですか。

宮口さん：ほかのものにも転用可能でして、その技術を持っているのが、まさに川崎にある会社なんです。川崎市さんの御紹介でその会社と出会って。ただ、全部のプラスチックの原材料を私たちのこの刈り草に置き替えることはできないので、今のところ半分までの含有比率で、今回はゴルフティー、それも河川財団さんがゴルフ場を管理されているので、ゴルフのティーというのを利用者に使う。やっぱり循環させたり身近に感じるようなものがないということで、今回、ゴルフのティーなんですけど、ほかのものでもできると感じています。

市長：そうなんです。そういう話って、例えばサントリーさんのカフェみたいなのを、簗毛さんのところで、環境に優しいものでカフェを提供するみたいなことって可能性ありますか。

簗毛さん：今、まさにお話伺いながら、弊社も中期視点では脱プラ文脈では取組、全社挙げて進めています。我々は1店舗しかないんですけども、まさに紙、プラカップの今併用の状態になっていて、少し課題を感じていた部分もあったので、ぜひ、またお話できればと思っていました。ありがとうございます。

市長：ありがとうございます。今、若干、次の第2部の未来に向けての話にちょっと踏み込みそうになったので、まずいなと思ったんですけども。山名さん、最後に2部に入る前に、少し何かコメント、今までのところでありますか。

山名さん：皆さん本当に素晴らしいコメントで。2部のほうはすごく、少し楽ちんにやらせていただこうと思っていますので、安心してください。

市長：ありがとうございます。それでは、現状の皆さんの活動と課題感みたいなものをお話しいただきました。この課題感をもとに、次の第2部で山名さんに、またコーディネーターしていただければと思います。

それでは、第1部をこれで終了します。ありがとうございました。

(休憩)

<市長との意見交換②>

司会：それでは、お時間となりましたので、意見交換を再開いたします。

進行役を、福田市長からミズベリング事務局の山名さんへバトンタッチし、意見交換をさせていただきたいと思います。

ここでは、2つ目のステップとして「多摩川の未来を想像（創造）する」というテーマで、意見を交換していただきたいと思います。

山名さん、よろしく願いいたします。

山名さん：こんにちは、山名でございます。今日はよろしく願います。

すばらしい、昨日まで天気がよくなかったんですが、今日は最高ですよ。それにこの場所、すばらしいですね。僕も何度か来ています。東京でも有名です。今日、僕ミズベリングのフェイスブックに、今日ここで皆さんと対話しますって書きました。何やるんですか、いや、市長と水辺関係の皆さんが集まって、川崎の、多摩川の未来について話すんだよ。関心がありあり。今日何か新しいことが決定して発表するというので、僕もするんですかね、分かりませんがね。要は、こんな会も僕、実は全国で200か所ぐらいやっていて、もっと創造的に、もっと未来に向けて面白く河川空間を考えようじゃないかというのが、ミズベリングなんですね。

国土交通省が始めたんですけども、とにかく創造的に、常識を超えてやろうと、これが合い言葉です。これまでにあった河川空間とか、公共空間にとっての一つの縛りみたいな、さっき議論がありました。使っていいか、使ってよくないか。あれがありますよね。基本、全部使っていいです。公共空間は市民のもので、行政のものじゃありません。だけど、さっきありましたけれども、どの程度、どのふうに皆さんの丁

解を得てやるかって大事なんですけど、ここはどんどん今ですね、市民の側に利用の拡大の知恵が求められているんですね。はっきり皆さんも分かると思う、そのためのこういう会議なんで、行政の方の合意が、許可があるかどうかじゃなくて、市民の人のより強い創造性があるかないか、これがまちの共創なんです、はっきり言うと。そういう時代になっていって、河川空間をどう使うかというの、もう本当の、世界中の共創になっています。

ちょっと僕が話しますね。そういう話に持っていくように。55分ぐらいね。その水辺はもっと心躍る場所になる、これがミズベリングの合い言葉でございまして、そもそもこれやっていいんでしょうか、やっちはいけないんでしょうか、別にどこでバーベキューをやったって構いません。構いませんといって、俺は市民の立場で言っているんだけどね。怒られたら、誰が怒っているのかよく調べればいいだけの話なんです。やっていい場所でどんどんやればいいですよ。何となく、洪水があるからやっちゃいけないとか何かあるけど、ちょっと日本がすごく萎縮した。だから、萎縮したのでもっともっと創造的に考えないと、これは公共空間の使い方が行政任せじゃなくて、市民と対話するような場合ということでミズベリング。その水辺はもっと心躍る場所になる。こういうロゴマークを作った。いわゆる行政のやるアクションじゃなくて、市民がワクワクして水辺のことを考えるアクションをつくりましょうというのが、ミズベリングです。

3バージョン計画を持っているんですよ、3バージョン。水辺にモチベーション、水辺のリノベーション、水辺のイノベーション、この3バージョン計画、これは昨日考えたんですけど。もう10年やっているんですけど、昨日考えたように発表するという、このスピード感、特に今、水辺にモチベーションあるかって、そういう議論になっていますけれども、もちろんあります。めっちゃあります。もっと言えば、世界は水辺にモチベーションが、全ての都市はあります。発展する都市は、全て水辺のモチベーションで動いています。河川空間で何をしたいか、何をするか。今日この場所は、この空間のデザインは、何がベースになっているか分かりますか。黒い鉄骨、茶色い木、これ全部ブルックリンのデザインがベースになっています。ブルックリンはニューヨークのイーストリバーの、マンハッタンの反対側にあるブルックリン。今はデザインも都市開発も、そこが最先端ということです。なぜここのキングスカイフロントの、このデザインがブルックリンスタイルなのかというと、これは分かりますね。ニューヨークっぽいからですよ。分かりますか。ここに工業地帯があって、向こうに東京があって、負けていられるかというのがブルックリンが世界に発展した、そして水辺から世界が変わったんですね。ブルックリンに世界のクラフトビールの発信地がある。そこから生まれたんですよ。そういうものを踏襲したデザインになっています。

そういう、ミズベリングで一番分かりやすいのは、「水辺で乾杯」ってやっていま

す。7月7日、水辺で乾杯。7月7日だけじゃつまらないんで、7月7日の7時7分、水辺で乾杯。全国の河川で自分がいいなと思っていたり、ここで乾杯したら楽しいんじゃないかな、ここで人が集まったら楽しいんじゃないかなと思う場所に集まって、どこでもいいから、橋の上でも下でもいいから、ちょっと安全を確認して仲間たちと飲物を持って乾杯しよう。青い服を着て、7時7分同時に乾杯する。ただ、それだけなんです。去年、おとしはコロナで小さくやったんですけど、今までの例ですと、目指してきたのは毎年1万人を目指していた。全国で今、10万人ぐらいやっています。やっていますか。河川関係の人は、ほとんどやっています。自分たちでフェイスブックに写真を撮って上げるだけです。つまり何かというと、バカなんです。いいですか、バカなことをみんなが同時にやる。このくらい面白いことを河川空間はできるんだということを皆に示す。だから、何が正しいからルールにのっとってやりましょうじゃなくて、そして自分の自慢のふるさとの写真をアップするというのを同時に1万数千人の人がやると、一つのムーブメントが起こりますね。何ですか、何ですかと、こういうことをやっています。

我々のチームは、チームで動いています。行政の人を中心に、それから我々のようなデザイナーとか建築家とかが集まっているんですけども、どういうふうに行っているかというチャタリングにやっています。時代のキーワードは、チャタリングです。誰が言っているかという、僕が言っている。特に公共空間のマネジメントみたいなものに非常に重要なのは合意形成なんですけれども、合意をつくる前に大事なものは、創意の形成、想像する意欲を形成することが大事だと思っています。それを説得したり、説明したり、納得させたりというだけじゃなくて、お互いが楽しく一緒にやろうねという感じに、どのようにチャタリングになるかということ。ミズベリングはチャタリングをテーマに。今日も後半ちょっと、市長、チャタリングの感じでやってみたく思いますので、ひとつよろしくお願ひします。あきれ果てたという表情で見られてしまったんですが。

我々、ミズベリング、早速目標を立てていますね。6月21日に、今、都内で一番水辺開発が進んでいる竹芝ポートホールでフォーラムをやります。今、全国で8人の最先端の水辺状況をやっている人に発表してもらおうということです。例えば、大阪とか、それから新潟とか、日本でも最先端の水辺チャタリングをしているグループの人、これは個人でも全然構わないです。行政の人、企業の人、人もいます。去年はスノーピークの人に発表してもらったんですけど、そのフォーラムをやります。ぜひ見てください。大体600人ぐらい集まります。Zoomでやると、その向こうに500人ぐらい。1,000人ぐらいの人が見るという、今の日本の水辺空間がどのように動いているか、トレンドが見えるフォーラムをやります。ぜひ川崎から代表で出ていただきたい。今日は何のために来たかという、その人を探しにきました。この躍動する川崎の河川空間を発表してもらう人は、はて誰なのか。私はプロデューサーなん

で、しゃべって面白そうで、絶対うけて、そういう人を探しにきました。大体目星は今つきました。

では、いよいよ議題に入ります。パリ五輪、東京オリンピックが終わりました。その直後、閉会式でこういう映像が流れました。パリは、エッフェル塔の下でバスケットボールの試合をやるそうですね。それから、道路を封鎖して100mの競争をやるそうです。なんと開会式は、セーヌ川で各国の選手が船に乗って、兩岸に観客席をちょっと造って、この河川空間を利用した開会式だそうですね。国立競技場をもう一回建てたりしない。あるものを使って、そこにまち全体の魅力を表現すると決めた。これを発表しましたね。すごいですね。ショックを受けました、僕。なぜ日本がこれができなかったのかと。いやいや日本では墨田川でも、多摩川でも、そんなに安定した水が流れていないから駄目なんだよ、できないんだよと。それよりも、やろうと思っていなかったことにショックを受けました。世界を驚かそうという覚悟がありますね。この機会に、自分たちのまちがどのくらい魅力的なのかを、自分たちの郷土の場所全体を使って表現しようと。このくらい私たちは、この川を楽しんでいるんだよということを世界に表現しますね。こういう感じが、僕はこれからの公共空間の使い方だし、1枚も2枚もパリは上を行っていました。一生懸命我々が国立競技場を造っている間に、コツコツと、というよりも大胆に、ほとんどあまりお金をかけないとは言いませんけれども、デザインを何にするかよりも、どのくらい楽しいかというのをベースに、こういうことを考えている。こういうのを、ここでやりませんか。セーヌ川は、この川幅よりも多分広いです、ここの方が。せっかく橋もできましたね。船が通れるかどうかは別ですけど、そのようなイベントをやったらどうですかというんじゃないくて、みんながですね、こういう公共空間というのは世界が驚くことができる場所。世界を驚かせて自分たちの価値を、住んでいる人たちも知らなかったと、さっきもみんなPRをどうするかって、一瞬にして振り向いてもらう機会をつくるということ、これ大事ですね。一々説得していくんじゃないくて、一瞬にして振り向く場をつくるという、それが公共空間の最大にできるメリット。何かそんなことを僕たちはずっとやれるんじゃないですかと、できるんじゃないですかと。我々自身はプロジェクトを持たないんですね。我々は、そういう可能性があるんで、世界のそういった出来事ですとか、公共空間のトレンドみたいなものをお知らせして、ぜひぜひみんなでもうワンランク、ツーランク上の利活用を目指しましょうよという話をしています。

ということで、今から後半に入りますので、今からワークショップをやります。という空気になっていないんで、ちょっと待ちます。僕は、今こんな話をしたんですけど、市長はどんなふうに受け止めますか。

市長：いや、水辺もそうですし、公共空間って、もっともっと楽しくなるというふうに思っているんで、多摩川なんかもっと可能性があるというふうには思いますね。

山名さん：そうですね。市長自身で、この大胆不敵、かなりこれ大胆不敵なことだと思うんですけど、セーヌ川でオリンピックの開会式、船を走らせちゃう。もちろん、もともと船が走っている状況なんですけど。だから、こういう大胆不敵なことを公共空間でやってみたいという申出が市民からあったらですね、そういったときにどうですか。

市長：いいですね。というか前ですね、東急の会長から、二子玉川のところで鶴飼いをやったら面白いんじゃないかというふうな話になって。

山名さん：鶴飼いです。

市長：そうです。それはぜひやりたいなというので、真面目に検討したんです。

山名さん：真面目に検討した。

市長：真面目に検討したんですけど、浅過ぎて駄目というのはあったんですけど、そういう何か突飛な話というか、できる、できないというふうなのを先に考えるんじゃなくて、面白いなというふうなのは、すごく大事なことだと思いますね。

山名さん：今のように、そう感じるように、おっしゃいましたけど、面白いがる。我々の面白いがる、こういう会議を全国あちこちでやるんですけど、面白いがる力、面白いがる人が住んでいるところが面白いまちになって、何となくいいまちになっていくんですよ。清く正しくより、よいことよりも、またどこかのまねすることよりも、ここだけの面白いことを話し合っている人の、面白い人がいるまちが、やっぱり面白いまちなんです。面白いがる素材として、河川空間は話し合うだけでも面白いがる力がすごい高まります。

ミズベリングは河川空間を面白いがる人たちの全国的なネットワークなんですよ。とにかく、ひたすら、バカみたいなことなんですけど、面白いがる力をだんだん高めていくと、行政の人たちと話したときに、行政の人にも実は重要なのは、面白いがる力が求められています。要するに、企業連携とかの官民連携と言いますが、実はそういう面白いがる力がベースになっていて、条件があって連携しているわけじゃないんです。要するに、これから新しい連携の条件をつくらなきゃいけないから、それは完全に民間側の、我々の市民側に面白いがる、どのぐらい面白いがるかというのがあって、行政の人たちは、それをどうマネジメントするかになっているんで。

今日、僕ちょっとやってみたいと思っているのは、正直できるかどうか分からないですよ。毎年200か所に行って、できるかどうか分からないことばかりやっているんですけど、ちょっと4人ぐらいのグループになってもらって、何をやったら面白いかな。そんなことを言われても困るだろうけど、強引に考えてください。5分で考えてください。いや、2分で考えてください。この多摩川の、ここでいいですよ。ここで世界が振り向くことを、ここ、この場所、何をやったら面白いかな。大胆不敵なアイデアを、そこの4人で、ちょっと後ろ振り向いて。強引です、強引ね。やりたくなかったらやらなくていいですよ。いやいや、ちょっと今スタートをするからね。2分で。川崎市の方、市の職員の人ね、これが全国の競争になっているから、川崎市の職員、どのくらい面白いかって話。この場所で、世界が振り向くような面白いことを考えてください。はい、スタート。

川崎市の職員の方は2グループぐらいになって、一番最初に1チーム、2チーム、川崎市チームに一番最初に発表してもらうからね、よろしくお願ひします。パリを超えるようなアイデアで、ひとつよろしくお願ひしますよ。

市長、姉妹都市ってどこですか。

市長：姉妹都市は韓国の富川、中国の瀋陽、ドイツのリュールベック。

山名さん：幾つもあるんですね。

市長：あるんですよ。それから、オーストラリア、ウーロンゴン。

山名さん：メルボルン。

市長：いや、ないですね。あとはリエカですね。

山名さん：そうですか。

はい、じゃあ時間になりました。終わり。それではですね、大胆不敵なアイデアを一番最初に川崎市Aチーム、発表してください。はい、どうぞ。Aチームはどこ。じゃあ、ここに来て、川崎市チーム。さあ、どのくらい面白いかな。これは、磯田局長が判定をします。

職員A：もうじき市制100周年を迎えるので、上空から見ると、多摩川に、カラー3本のブランドメッセージの川があるんですけども、あれが水面に流れていて、いろんな川がいろんな色で流れていくというのを上空から見る。

山名さん：この3本の、これね、これ。

職員A：はい、そうです。

山名さん：これが水面にガーと流れていくと。

職員A：それを100周年のときにやるということ。

山名さん：ドローンで撮影。

職員A：はい。

山名さん：じゃあ、これがもうこの1本の長さが200メートルぐらいあるんだよね。

職員A：それを何か33個ぐらいつくとですね、それが100色になるので、最終的には。

山名さん：何で33なの。

職員A：いや、100の短冊。

山名さん：100ね、なるほど。

職員A：もともとは、その100周年の。

山名さん：100周年だから。

職員A：はい。以上です。

山名さん：ありがとうございました。

じゃあ、市長、判定は。

市長：面白いと思います。

山名さん：（ピンポン、と機械音）今日、これがやりたかっただけ。これを持ってきた。

それでは次、Bチーム。100周年をだいぶ意識しているんだね。どうぞ。

職員B：川崎市役所で道路の関係をしている者なんですけど、すみません。一応Bチームで、先日スカイブリッジ開通、ありがとうございます。スカイブリッジを使って何かやりたいなと思って、これ道路管理者からいうと絶対局長に怒られるんですけど、橋の幅めいっぱい、600メートルあるんで、10メートル置きでも60文字書けるんですよ。なので、上から大きな文字を浮かび上がるようにすると、多分飛行機から見えると思うんですよ。

山名さん：橋の上に文字を。

職員B：ええ。「ようこそ川崎」でも、「おはようございます」でもいいんですけど、多分それだけ大きい字を橋上めいばいに何文字かやると、必ず空から見えないですか。写真を撮るじゃないですか。SNSで拡散するじゃないですか。ここはどこだっとなと思うんですよ。

山名さん：なるなるなる。

職員B：あともう1つが、せっかく橋を使っちゃうとあれなのかもしれないですけど、映画祭みたいな感じで、みんなでエアアのベッドでプカプカ浮かびながら、映画を見るようなシーンを多摩川でできないかなと。ただこれ、ちょっと今日、私すごく無責任な、道路の立場で来ているので。これを言うと多分怒られちゃうかもしれないんですけど。

山名さん：いい、いい。

職員B：取りあえず、こんなもので。

山名さん：すばらしい。じゃあ、プカプカ水面に浮かんで。

職員B：プカプカ浮かびながら映画を見る。

山名さん：巨大スクリーンを見ると。

職員B：ちょっと言い過ぎて。ちょっとやばいな。

山名さん：ドライブシアターみたいな感じね。

職員B：そうですね。

山名さん：これは面白い。絵がちょっと浮かぶ。この絵に近いね。

川崎の役所の人は、「上から見る」というのが好きみたいというのが分かりましたけれども。

職員B：すみません。以上です。

山名さん：ありがとうございます。はい、拍手。

磯田さん、今のどうですか。もうオーケーですよ。

局長：はい。

山名さん：もちろんオーケーだと。このくらいのこと全然、行政、局長オーケーだから。

局長：カウントダウンイベントでやってみるとか。

山名さん：はい、はい。今、聞きましたか。もう全然オーケーなの。ビクビクしちゃダメなのよ。局長は、とんでもないアイデアを待っている。ということで、水面でベッドを浮かべて映画祭をやるというので、僕、今フェイスブックで書いておきますので。

中沢さん：私たちが考えたのは、スカイブリッジがあるにもかかわらず、ここにウォーターアスレチックをつくろうかなと。

山名さん：ウォーターアスレチック、いいね。

中沢さん：羽田から降りてきたら、すぐ遊べる。川崎に来られる。

山名さん：じゃあ、水面に何かいろいろ浮いているやつね。すべり台とか。

中沢さん：はい。それを、世界一大きいものを造ってしまおうと。川崎から羽田に帰るときに遊びながら帰ってもらうというふうに、そうすると、いろいろ来てもらえるかなと。

山名さん：今、いろいろ砂浜とかに、向こう側に浮いているやつだね。

中沢さん：疲れたら、東急REIホテルのカフェでゆっくりしてもらえればいいかなと思います。

山名さん：なるほど。

中沢さん：以上です。

山名さん：それでも、ここかなり水面が安定していますし、深さもそんなにないのかな。

中沢さん：すみません、全然現実味を考えずに。

山名さん：いやいや、そんな考えなくていいから。面白いですね。さあ、だんだん見えてきた。水面にベッドで、ウォータースライダーがあつたりする。いいじゃないですか。もうできそうですよ。

宮口さん：うちは3つ出まして。学生がいるんですけども、学生は、上から見て水面に花とかで模様を模すような感じで映えるみたいな話もあつたり、あと、河川財団の八木さんからは、さっき川崎市の方の名刺にドラえもんがついているんで、ドラえもんの船みたいなものを走らせたらいいんじゃないかって話と、僕個人的には、これもう1番、一押しなんですけど、川崎市の中学3年生が何人いるか知らないんですけど、全員中学3年生の卒業式に泳がせる。

山名さん：泳がせる。

宮口さん：もう並んで泳がせる。そのためには、2つやらなきゃいけないことがある。1つはきれいじゃなきゃいけないんですよ。これ市長の宣言ですよ。子供を安心して泳がせてもいいぐらいのきれいな川にしますと。

2つ目は、危ないとかいう人がいますよね。だから泳げない人は、さっき浅いとかいろいろあつたんで歩かせる。もう何か持って歩いてでもいく。とにかく東京に渡って帰ってくるということを川崎市の中学生在がやっていったら、何万人だか分かりませんが、そういうことをやらないと川崎市民としてのアイデンティティができないということを世界に発信すると。

山名さん：俺なら、きれいにするのはちょっと時間がかかるから、汚れても大丈夫なような水中マスクを開発すると。

宮口さん：ちゃんとそういうところをやりましょう。

山名さん：そのほうが川崎らしいんだよな。

宮口さん：そうですね、そうしましょう。

山名さん：この川でも大丈夫なマスクを、この工業地帯の人と一緒に開発して。

宮口さん：それはいいですね。

山名さん：それ結構いけるかもしれない。

宮口さん：確かに。どんな川でも泳げるようにするということですよ。

山名さん：そうそう。

宮口さん：以上でございます。

山名さん：面白いね、面白いね。

蓑毛さん：2つ出ました。1つは、ちょっと場所がここではないんですけど、二子新地V S
二子玉川で綱引きを。

山名さん：やっていたよね、2年ぐらい前から。綱引き、やっているよ。

蓑毛さん：やっているんですか。

山名さん：俺、二子玉側だから、よく知っているもん。溝の口と。綱引きしていたよ。知らないんだ。

蓑毛さん：知りませんでした。

山名さん：多分、おじさんだけでやっていたのかな。綱引き、いいと思う。

蓑毛さん：2つ目が、ここに水中レストランを造るという。

山名さん：水中レストラン。

蓑毛さん：ブリッジの橋脚に固定して、水辺の生物を見ながらお食事ができるというのがあったら、面白いんじゃないかというアイデアが出ました。

山名さん：いいね。じゃあ、ブリッジから降りていける。

蓑毛さん：何か階段とかで降りて行って。

山名さん：なるほど。それはもう、局長が造ってくれるよ。ブリッジの途中から川へ降りていく。

これね、僕は200か所ぐらい、このワークショップをやると、そのアイデアが出てくるんですよ。橋の途中から川に降りるアイデア。これは結構出てきます。なるほど、いいじゃないですか。若い割には意外に現実的なアイデアだったね。

伊藤さん：ここの班でも綱引きは出たんですけれども、オリンピックだったら対抗できるのはワールドカップかなと思ひまして、川崎フロンターレにクラブワールドカップで優勝していただいて、川崎はサッカーが強いねということで、そこでワールドカップの開会式をする、川崎市長VS中村憲剛で泳いでいただく、これでどうでしょうか。以上です。

山名さん：今、フェイスブックにもう書くよ。やっぱり泳ぐっていうのが大事なのかな。泳ぐというと、何かもうすごい挑戦感があるもんね。渡れるのか渡れないのかとかって、それを何か、ちょっとあるね、遠泳的なね。

山下さん：発表させていただきます。以前、提案したんですけれども、却下されたことなんですけれども、多摩川には「ハマダイコン」という植物が咲いていまして。

山名さん：ハマダイコン。

山下さん：この時期になると白い花が咲いて、とてもきれいなんですけれども、ハマダイコンの種をまく人というのをやってみたいなというのを提案したことがあります。

山名さん：どこにまくの。

山下さん：河川敷全体です。

山名さん：全体に。

山下さん：そうすると真っ白になって、とてもきれいですし、多分見に来てくださる方もたくさんいると思います。

山名さん：それは菜の花みたいに。

山下さん：そうです、そうです。

山名さん：ちょっと低めの。

山下さん：そうですね、それほど高くはないんですけど。

山名さん：いつ、春になったら咲くんですか。

山下さん：春の時期になるととてもきれいで、あとハマダイコンは食べることができるんですね。種子もですし、根っこの部分もちょっと大根みたいな味がするんですけど、それも食糧難に適応できるかなというのもありまして、それを提案したいと思います。

山名さん：もうこの際、大根畑に変えちゃえと。

山下さん：はい。

山名さん：それはいいですね、日本最大の大根畑が延々、何か4.5キロあります、みたいな。上から見ると白い線が引かれているみたいな、そういうことですよね。

鈴木さん：そんなに狭くないです。

山名さん：そうそうそう。

鈴木さん：4.5キロなんて、そんなに小さな話ではなくて、流域全体に。

山名さん：全部。

鈴木さん：ここから上流まで全部。

山名さん：ここから。

山下さん：全体です、多摩川。

鈴木さん：多摩川全体。

山名さん：規模が違うの。

鈴木さん：その4、5なんて小さい、小さい。

山名さん：小さい。

鈴木さん：32キロ、バーッとやる。

佐川さん：もう、分かっていない。

山名さん：分かっていない、ごめん、ごめん。どうぞ。

佐川さん：もういいです。

山名さん：もういいですか。

ごめん、ごめん。もうすっかり怒られちゃったね。上流から下流までね、全部やる。そうそう。なるほど、そういうちょっと風景が浮かぶよね。菜の花畑がザッとあるみたいない感じで、何か白い線がずっと、この川崎側のこっちのほうにずっと流れていくのね。すばらしいね。ありがとうございました。

そんな感じで市長、みんな面白いことを考えろということ、意外に考えるんですよ。それで自由に、自由に発想するって結構難しいんですけど、意外に皆さんは現場に行っているんで、パッと出てくる。

市長：いや面白いですね。これは環境に正しいか、正しくないかというのは、また別問題として、課題としてはありますけど、アイデアとしては面白いのはいっぱい出てきましたね。

山名さん：そうそうそう。どうしても行政の場だと、みんな気を遣っちゃって、これダメかなとかってあるんですけど、一旦気を使わないで発想するということ、やるのが実は非常に重要で、世界中で公共空間、教育問題もそうなんですけど、公共空間についてどういうアイデアを出しますかということ、小学校からこうやっているんですよね。それが、まちにコミットするきっかけになっていく。それは道路もそうなんです

けど、これから車はどんどん減るし、4車線ある道路は1車線なくなりますよ、そのうち。そこを公園にしようという話がある。そのくらい空いている場所がどんどん増えてくるんですね。それを、ただただ維持管理とかしているというのは、もう無理なんですね。税金がもはや集まらないから。だから自分たちで楽しむ場所をつくっていくという時代なんですね。公園もお任せしていて、行政がやってくれるという時代じゃなくなっちゃうんで。僕は、堤防の草を刈る、あれは金がかかるんです。あれを3本の線だけ残して、川崎はこれ真っすぐなので、ちょっと斜めに、アディダス堤防というのにするとお金が増えるんじゃないかと思ってね。ちょっとスウォッシュマークにカットしてね、ナイキ堤防とか言えば、そういうコラボとかできないかなど。空の上から見るとナイキ堤防が見えるとかね。そんなスマッシュなアイデアでもいいんだけど、ちょっと一緒にやってみて、話題にして、これができるんだったらあれができるみたいなことをどんどんやっていく。

ちなみに、この今日僕が着ているこのジャケットは、ミズベリングとアルマーニ、御存じ、皆さんアルマーニって。アルマーニのコラボで作っているんですよ。テストで作ってくれたの、イタリアのナポリの工場とアルマーニと。嘘ですけどね。本当に聞こえるでしょう。本当に聞こえればいいの。コラボレーションってそういうもので。

条件が整うんじゃなくて、イメージが膨らめば出来上がる。そんなことを発想する人です。発想する人のネットワークがつながると、自然に渦巻ができて、今日ここでやってこんな話をしましたというのは書かれますよ。なので、そうすると川崎発信でつながる全国の人がいて、世界でつながっているというの、そういう速度感だと思うんです。どうせだったらもう世界の人とどんどんつながって、新しいことを起こしていくことができると思っています。なので、今日はちょっとそういう、僕からのお知らせは、6月21日に全国大会をやりますので、ぜひ市長、この中からどなたか代表で出ていただいて、川崎市職員の方でも結構です。7分間提供しますのでプレゼンテーションを、やっていただくと。

ありがとうございました。一旦僕のコーナーはこんな感じで。出たアイデア、振り返り。

スカイブリッジにこんにちは！の、おはようございますとかのシールを路面に貼る。それから、水上ベッドでゆらゆらしながら映画祭♪、いいですね。水上アスレチックで川崎へ！通れる、ふわふわして。中学3年生みんな泳いで多摩川を渡るまち。成人式みたいなね、そういう感じね。綱引きはこっちもこっちも出ていたんですけど、もうやっちゃえばいいんじゃないの、来週あたり。要は綱引きをやるというだけだと、ちょっともう一つ面白くないから、もうちょっと何か1つ加えてもいいね。何か、それをどうしてもマスコミが取材に、はっきりとね、CNNがどうやったら取材に来るかということ。一緒にカミさん来ていますが、僕が何か仕事をすると必ず来ます。僕は日本愛妻家協会ってやっているんですけど、キャベツ畑の中心で妻に愛を叫ぶ

というのをやっているんです、愛しているよって叫ぶやつ。人が誰もいないところで愛を叫ぶイベントをやって、世界が動きました。毎年CNNが取材に来ます。なぜかという日本人で愛を叫ぶ男がいるのかと。世界の中では日本人は絶対に愛情表現をしない男たちが住んでいる国という見られ方をしているんで、そんな中であえて言うてみたら注目される。

次、ワールドカップに合わせて何かプログラムをやると。いいですね。11月、今年。そうだよ、今年11月やるよね。何かやっちゃったらいいいんじゃないの。勝手にワールドカップ連動何とか大会ということで。ポートランドの水面では、小さなミニサッカーのステージみたいな、船を造って、それを水面に浮かべて、それでサッカーをやっていましたよ、水上サッカー。ナイキがスポンサーで。世界中に報道されていました。

次、ハマダイコン畑に変えちゃう！ いいですね。この川崎に面している全部の距離、失礼、上流から下流ですね。

というようなアイデアが出ました。ありがとうございました。

係の方、このくらいでよろしゅうございましょうか。局長、大体こんな感じでよろしいですか。

局長：はい。

山名さん：大丈夫ですか。市長、こんな感じでやらせていただきましたけど。

市長：はい。先ほど、宮口さんがおっしゃった、ある学年で泳ぐというふうなお話でしたけど、川崎の小学校では多摩川の勉強とかしますけど、例えば、もうちょっと上の学年で、ある学年に来たら全員がやるというふうなのは、それは何か大事なポイントかもしれないですね。

というのは、2年後の市制100周年のときに川崎市歌を歌えるようにというふうな形で、7年ぐらい前からずっと、学校で全員歌えるようにしているんですね。市制100周年の成人式には、今まで誰も歌わなかった川崎市歌を全員が、100周年以降は成人式で必ずみんなが歌えるようにというふうなのを、ある意味、学校教育の段階でやっていっているわけですよ。それって愛着になるし誇りになるし。だから多摩川も、愛着になり誇りになるというふうな形には、みんなである一定のときに全員がそれをクリアしていくというふうなのは、何か大切なことかもしれないというのを御発言を聞いていて、泳ぐかどうかは別にして、何か大事なかなというふうなことを感じましたね。

でも何か、でも本当にいろんなアイデアがあって、こんな短時間でこんな面白いことをやってというふうなのがあるのはすごく素敵なことだなと。やっぱりコンテン

ツカというふうなのがすごく大事で、発信の方法っていろんな手段があって、先ほども申し上げたような電鉄さんの力を借りたりとかって、いろんなSNSを使ってとかというのはあるのかもしれませんが、そもそものコンテンツが面白いのか、人を惹きつけるものがあるのかということが、何よりも大事だなと、そこを徹底的に何かいろんな人のアイデアを混ぜ合わせると、ちょっと自分では思いつかなかったなって、僕も今、今日、皆さんのお話を聞いていて、自分じゃ思いつかないなということばかりですから、それをどうやって実現していくかというふうなのは、いろんな意味で正しくなくちゃいけないという部分は、面白さということだけじゃなく、やっぱり環境にも正しいということも必要ですし、そこがどこかで組み合わさるいいポイントというのがあると思うんで、そのコンテンツはやっぱりみんなで、こういうメンバーからそろっているということは本当に何かうれしいことだなというふうなのを、今のこの第2部のところだけでも感じさせていただきました。ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。

以上で本日のテーマ、多摩川の未来を考える～150万人市民が親しむ川づくりに向けて～の意見交換は終了となります。皆様、御協力をいただきまして誠にありがとうございました。

最後に、福田市長から全体を通しての感想、コメント等をいただきたいと思います。市長、よろしく願いいたします。

市長：今、言ってしまった感じですけども、ありがとうございました。

まず第1部では、皆さんがそれぞれにどんな活動をしているのかということを知ることができましたし、もっと深く知りたいというふうなことを思うことができました。私自身もそうだと思いますし、参加者の皆さんでも、あ、こういうことをやっているんだ、むしろこういう人たちが集まっているんだということに発見があったような気がします。その課題というふうなのを、自分たちだけで解決するというだけじゃなくて、いろんな人とつながることによって、ここの部分は解決するかもしれないという、そういう何か気づきがあったように思います。ぜひ最初の、今回の車座の目的でもありますし、究極的には、ここに集まっている、あるいは川崎市の目標でもあります、やっぱり全ての市民が多摩川のことに愛着を持って、誇りに思っ愛するというふうな、そういう感覚が芽生えていくための仕掛けってどんなものがあるかということ、これからも考えて、いろんな人たちとつながっていきなというふうに思っています。

川崎市でできることというふうなのは、多くはないけど少なくともないというふうに思っています。それは規制的なものというふうなのが、こんなに規制があるんだって

ら、こういうふうなことを行政でなければできないという部分もありますし、行政じゃとてもできないなというふうなことというのが、むしろソフト面でいうとほとんどかなというふうに思います。

ですから、どううまく川崎市と水辺の、例えば、川崎水辺の楽校の1ということよりも、川崎市と水辺の楽校と小田急とカワスイさんとかというふうな、何かいろんな組合せのことによって、いろんな価値を生み出すことができるのではないかなということを思いました。その中で、ぜひ多くの人に魅力を感じていただけるような機会をもっと多く、そしてもっと強く発信していくことができればというふうに思いました。

今日、いろんな気づきをさせていただきましたことと、それから皆さんの活動がそれぞれ、ますます御活躍いただけますようお願い申し上げまして、まとめとさせていただきます。

本日はありがとうございました。